

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの大地を切り開いた政治家：
モンゴル国国家大会議議員シャラビン・ゴンガード
ルジ(元首相)は語る

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2009-04-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://doi.org/10.15021/00001896

モンゴルの大地を切り開いた政治家 モンゴル国国家大会議議員シャラビン・ゴンガードルジ(元首相)は語る

解説

- | | |
|-----------------|--------------|
| 1 父の運命 | 9 国営農場の運営 |
| 2 専門との出会い | 10 野菜栽培の成功 |
| 3 国営農場の建設 | 11 果実栽培の試み |
| 4 モンゴルの挑戦 | 12 国営農場の解体 |
| 5 移行期における農業復興政策 | 13 近年の社会動向 |
| 6 専門家の育成 | 14 日本による農業支援 |
| 7 土地私有化の課題 | 15 再協同化の動き |
| 8 ゴンガードルジ氏の家庭 | 16 農耕の妥当性 |
| | 17 私有化の過去と未来 |

解説

ゴンガードルジ氏は、1937年、現在のドルノゴビ県ツェツェグト郡に生まれた。彼の父はチベット仏教の僧であり、医師でもあった。当時、急激に進められる社会主義化に対して、僧やかつての貴族たちが抵抗する事件が相次いだため、僧たちを反動勢力として一掃する粛清が開始され、彼の父もまた逮捕されてしまう。ところが、九死に一生の幸運を得て彼の父は死を免れ、彼は父を失わずに育った。父の勧めで進学し、しかし、父の意志に反してモスクワへ留学した彼は、そこで思いもよらなかった専門を身につける。ゴビに生まれ、農耕のない世界に生まれ育った若者が、農耕の専門家となったのである。

1960年にモスクワから帰国すると、彼はただちにウランバートル市郊外の農場で農民とともに農作業にあたる。現場での実地研修から始めるのが、当時の幹部養成システムであつたらしい。以来、ずっと彼はこの専門をもってモンゴルに新しい部門を切り開いてきた。「未開拓地の開墾」というスローガンのもとで、1960年に20万ヘクタールだった農地は、民主化を迎えるまでの30年間で80万ヘクタールに増加した。こうした本格的な開拓期をゴンガードルジ氏は率いた。

1968年から1975年、農牧業省の副大臣を務め、その後も副首相や農牧業大臣、農牧業食糧省大臣などを歴任し、民主化の初期、1990年3月から10月まで首相として政治改革にあたつた。2001年の選挙で人民革命党が圧勝した際、国会議員となり、以来、農業問題を担当している。それは同時に土地問題とも無縁ではありえない。

現在、モンゴル国でもっとも大きな社会的課題であり、かつ政治的問題となっている土地の私有化について、インタビュー当時、ゴンガードルジ氏の考え方は明快であ

った。しかし、まさにその問題を担当している政治家の意向どおりに事が進んでいるわけではない。国際的な金融機関の圧力と、それに迎合する政治家たちによって、モンゴル人自身の慎重な態度を越えて事態は急激に変化している。

ゴンガードルジ氏は現役の国会議員であったため、まずウランバートル市中央部にある国会議事堂内の執務室で会見して約束をし、インタビュー自体は2001年8月にホテルの一角でおこなった。映像をとまなうものであることを知らなかった氏は当初一瞬とまどいを見せたが、ひるむことなく、淡々と語り始めた。

彼がその半生を傾けて作り上げた農業部門、とりわけ穀類の生産部門は、現在ほぼ壊滅状態にあると言っても過言ではない。20世紀を通じて粉骨砕身してきたことが、目の前で瓦解したときの悲しみは計り知れない。その悲しみを語りながらも、彼の口調はあくまでもきわめて穏やかであった。激して非難することもなく、嵩じて賞賛することもない。けれど、この「失われた10年」の再建が彼にはまだ義務として残っているからであろう。

G: Sh.ゴンガードルジ

K: 小長谷有紀

L: I. ルハグワスレン

1 父の運命

G: 撮影から始まるようですね。私はまだ撮影に対する準備ができていません。日本のテレビにきれいに映らなければなりませんよね。

K: この画像は博物館用に撮っています。

G: この撮影の目的をまだ知らないのです。会見して話すだけだと理解しているのですが。

K: あなたのお話が私どもの博物館に保存されます。本日はあまりお時間がなく、お急ぎのようですので簡単におうかがいしようと考えています。

G: まあ、そうですね。時間の許す限りお話ししましょう。

K: はい、どうもありがとうございます。

G: では私の経歴から始めましょうか？

L: そうしましょう。ご自身の経歴から始めていただけるとありがたいです。

G: 私は旧セツェン・ハン盟のツェツェン王旗すなわち現在のドルノゴビ県のツェツェグト郡の地に、シャラブ家の4男として生まれました。マーニトという山のそばで生まれたそうです。私の父母は4子をもうけ、そのうち2人が亡くなり、兄と私の2人が生きながらえました。幼少のころは子ヤギ、子ヒツジの放牧をし、牛糞や薪を拾

い、ウマに乗るなどして過ごしました。私は幼少を兄、母、祖母と4人で過ごしました。これは私の経歴の特筆すべき点です。私の父はチョイルの寺院で暮らしていた偉大な薬師の僧侶でした。そして1939年の大粛清期に、私が2歳、兄が6歳の時に逮捕されました。私の父は人の診療をし、薬を調合する薬師、偉大な僧侶であったために逮捕されたのです。薬師というのは現在の理解では医師ということになります。そして、私たちの運命の妙によってなんとか殺されることは免れました。本来ならば殺されていたはずでした。ウランバートルに連行され、多くの僧侶や一般人とともに刑務所に留置されました。1ヶ月がたったころでしょうか。ある夜、車に囚人を乗せたのだそうです。夜12時ころ、真夜中のことだったそうです。乗せていたそうなのです。すると、

「おい、車に入りきれないぞ!」と言うのだそうです。ヘンティー県のある僧侶と私の父の2人が車に入りきれずに残されました。こうして2人が残されました。その他の人は車に詰め込まれ連れて行かれてしまいました。悲惨なことが起こったのは想像に難くありません。あちらこちらに連れて行かれて殺されたり、あるいはソ連に追放されたり、どうなったかはわかりません。そしてその翌日、私の父はもう1人と共に連れて行かれ、

「では、おまえたち2人に10年の懲役刑を科す」と宣告されたのだそうです。もしその車に乗ったならば直接銃殺されていただろうと私は考えます。車に入りきらなかったため10年の刑を科されただけで生き残りました。そしてズーンハラーで10年間服役し出所しました。そして父と再会したのです。13歳までは父親なしで育ちました。母は私たちの世話をし、保護し、学校に行かせ、生活上のすべての仕事をし、外では男となり、家では女となる生活が続け私たちを育てたのです。私の父は48歳で出所しました。私はそのころ小学校を卒業して1年間中学へ進むことなく、もう学校をやめてしまおうか、母を手伝おうかと考えていました。兄は学校をやめ、牧民になっていました。父は出所してきて、

「息子よ、決して学校をやめてはいけない。おまえの兄は牧民になるけれど、おまえは教養ある人間になるべきだ」といって県の中心地にある学校に行かせました。そして県の学校で勉強し、1954年にドルノゴビ県の10年制学校を全優で卒業しました。すべての学期、学年で優をとっていました。そのころ外国の学校に留学する希望が強くなっていました。そしてソ連に留学することになりました。父は、

「国内の大学でも劣ることはないだろう」と言っていました。父は自分と同じ医師の専門を身につけさせようと考えていたようです。医師にするつもりで、国内の医科大学に入りたいと考えていたようです。私は、

「いいじゃないですか、お父さん! 私は外国を見て見聞を広げたいのです、学問も学びたいのです」と言いました。モスクワに留学し、1960年に卒業し帰国しました。

2 専門との出会い

K：どこの大学ですか？

G：ティミリャーゼフ記念農業アカデミーというところで学びました。世界的に有名な学校です。農業部門の多くの著名人が輩出されている大きな学校です。

K：その学校はご自身が選ばれたのですか？

G：この学校を私自身が選んだわけではありません。そもそも農学という専門も自分で選んでいません。私はゴビ地帯出身なのです。植物の専門、農学になるとは私には想像もできなかったことでした。私は最初、ロモノソフ記念モスクワ大学の生物学科に割り当てられていました。そして故郷を離れてウランバートルに着いてみると、誰かが裏口を使って私の最初の割り当てがなくなっており、気づいてみると、

「君はロモノソフ記念モスクワ大学へ行けなくなった。ティミリャーゼフ記念農業アカデミーに行きなさい」と言われました。ティミリャーゼフ・アカデミーとはいったいどのようなところなのかまったく知りませんでした。農業関係の学校であると聞いていたにとどまりました。これが1954年のことです。そしてその学校に行きました。そこで5年間学びました。ここでもまた良、優をとって学び、農学技師、農学者という専門を身につけて帰国しました。そして働き始めました。

帰国してまずアムガラン国営農場に就職しました。アムガラン国営農場は非常に大きな国営農場でした。ガチョールト、トルゴイト、トゥルホラフ国営農場などはこの国営農場の下部組織でした。この国営農場は食用野菜を栽培していました。年間四季を通じてウランバートルに野菜を供給する主要な農場でした。野菜以外に酪農場を有し、狐、黒テン、鹿を飼育していました。そのような大きな農場でした。これは1950年代に設立された農場でした。その礎となったのはアムガラン野菜農場という名前の農場で、ずっと昔に作られたと言われています。昔、中国人たちが野菜を栽培していた場所です。当時は売買城と呼ばれていました。中国人たちが去ったあとにモンゴル人が引き継いだと言われています。かなり昔から農業生産をおこなってきた場所です。それを基にアムガラン国営農場が設立されました。私はその農学技師長として働くことになりました。

大学を卒業後、農牧業省を訪れました。私はモスクワの大学を卒業したので、私自身の考えとしては農牧業省で働くつもりであって、まさか国営農場に行かされることはないだろうと考えていました。しかし、入省させてもらえませんでした。アムガラン国営農場に配置されてしまいました。そしてそちらに赴任しました。そこに赴任し、素晴らしい農場で自ら農民たちと一緒に野菜を栽培するようになりました。また、野菜を栽培している地方を回りました。

L：その当時、農民は全員モンゴル人でしたか？

G: そうです。モンゴル人でした。内モンゴルから来た人がかなりいました。彼らは1940年代に、戦後、北モンゴルにやって来て定住し、モンゴル国籍をとっていました。ですからモンゴル人労働者ということですよ。でも野菜作りをととてもよく知っているのです。彼らはとてもよく働きます。そこに1つのガラスの温室がありました。アムガランにはもう1つガラスの温室がありました。そこにはかなり多くの中国人農民、学者が働いていました。様々な種類の野菜を栽培していました。現在はもう栽培をしていません。私が働いていた当時、約20種類の野菜を栽培していました。ウランバートルに野菜を供給していました。早生の野菜、特に香味野菜を供給していました。バトスンベル、ズーンハラー、ジャルガラントなどからジャガイモなどその他の野菜が供給されました。香味野菜はこの農場が供給していました。こうして自分の専門に従って農耕と運命をともにする人生がここから始まったのです。

これは私に大きな機会を与える出来事になりました。省庁の執務室で机に向かう役人ではなく、大学で学んだ知識を忘れない内に実地で農耕の仕事に自らの手と足を使って格闘してきたことは、それ以降の人生に非常に役に立ちました。そして1年あまり働いていると、国営農場管理局から呼び出しを受けました。国営農場管理局とは閣僚会議の直属組織ですべての国営農場を所轄する機関でした。

当時すなわち1950年代後半、モンゴル人民革命党は未開地の開墾という大きな目標を掲げていました。こうして呼び出しを受け、その国営農場管理局に行きました。人事課長のナンザドという太った人がいました。その人は、

「あなたを我が管理局長のローホーズさんが未開地開墾という党の政策を実施するという大きな任務に推薦し、管理局で働いてもらおうとのことです。あなたはここで働いてください」と言います。当時、かの有名なローホーズ氏は管理局長だったのです。それを聞いて、

「私はアムガラン国営農場に赴任し、1年も経っていません。生産現場で働くことは私にとってとても必要なことです。もう1年働くことを希望しています」と言っていました。その人は何も言いませんでした。その後20日あまり過ぎたころ、管理局長が呼んでいるとの呼び出しが再びありました。別段気になることもありませんでした。そして例の人事課の人のところに行きました。とても不機嫌そうです。

「君、上の階の局長のところに行きたまえ」と言うのです。そしてローホーズ局長の部屋に入りました。管理局長の部屋に初めて入ったのがこのときでした。まったくもって大学卒業以来、「長」の付く人の部屋に入るのもこれが初めてでした。部屋に入

て、
「こんにちは」と言っても局長は何もしゃべりません。少しのあいだ立ちつくしていました。すると、

「おまえは何しにきたのだ?」と言います。

「私はアムガラン国営農場の農学技師長です。あなたの呼び出しを受け参りました」といいました。すると、

「おまえは祖国のため、国民のために党・政府が掲げた重要な活動に参加することをよしとせず赴任しないとは、なんとだらしのない、なんといい加減なやつなんだ？」と、
いって叱責されました。私は、

「いいえ、局長！私は生産現場でもう少し働いていたいのです。私にはとても必要なことなのです」と言うと、

「何が生産現場か、お前はつべこべ言わずにすぐここにきて働け！さもないとお前を譴責するぞ」と言うのです。そのとき私も若かったのです。24歳だったと思います。

「譴責されるというのはよくないことだ」と考えました。そして国営農場管理局で働くためにやってきました。私の2つ目の仕事はここから始まりました。

全国で未開地開墾運動が全盛でした。私は1960年の5月に管理局に赴任しました。地方には数千人の若者を派遣により連れて行き、ソ連からは多くの学者、専門家、技師が来ていました。あの人跡のなかった未開地はテント、幕舎で満ち、活動は本当に拡大していました。これは大労働期でした。私たちは昼夜の別なく新たに開墾されようとしている未開の平原に出張して働くのです。このように私たちは約300ヘクタールの未開地を開墾したのです。このときまでモンゴル国では小規模の土地で農耕をおこなっており、農耕は国内経済に何の影響も及ぼしていませんでした。国家規模で需要のあるすべての小麦粉や穀物を外国から輸入していました。

未開地の開墾の主な目標は国内の小麦粉の需要を自給すること、また家畜の飼料基地を作り出すことにありました。当時モンゴルの家畜は自然災害の前に何の保護もなく、無力で、飼料がないために数千頭規模で死ぬことがありました。このため家畜の飼料基地を作ることとは必要不可欠な事業の1つでした。このようなとても大きな目標を掲げ、2〜3年のあいだに未開地開墾という大きな目標をほぼ達成し、32万ヘクタールの土地を新たに開墾しました。1960年に初めて1360万ブー（1ブー＝16.3kg、22万1680トン相当）を収穫しました。モンゴル国の歴史上、このように大量の収穫高を記録したことはありませんでした。このころから農耕がモンゴル国経済において、農業の独立部門として発展していきました。こうしてモンゴル国の農耕の新時代の歴史が1960年から始まったのです。この活動に最初から参加したことに私は大きな喜びを持っています。今日に至るまで様々な仕事を成し遂げてきましたが、この農耕の活動、すなわち農業の活動から離れることはありませんでした。モンゴル国政府の首班を務めているときにもこの部門に留意し、心の中で考えてきました。

3 国営農場の建設

L：当時、国全体でいくつの国営農場がありましたか？

G：当時、未開地開墾のために新たに設立された国営農場が全部で20あまりありました。そしてのちに飼料農場とあわせて全部で60あまりになりました。

L：モンゴル国の農耕における主要な地域はどこですか？

G：主要地域はセレンゲ、トゥブ、ボルガン、ドルノド、ヘンティー、スフバートル県北部、西に行ってウブスハンガイ、アルハンガイ、ハルホリン、オブス、ザブハン県などが含まれていました。ネグデルがかなり農耕を行っていました。そしてオブス県のオラーン・ゴム、フブスグル県のムルン、ドルノド県のチョイバルサン、ヘンティーのウンドゥルハーン、ウランバートル、セレンゲのスフバートル、ボルガンのボルガンなどに9つの大規模な小麦粉工場が設立されました。そしてこの諸工場を中心に原材料基地を作りました。未開地開墾により国民の小麦粉需要を完全に充足しました。1980年代、モンゴルの農耕は真の最盛期を迎えていました。私は1968年から1975年まで農牧業省の農耕担当副大臣を務めました。この時期、農耕の物的基盤が非常に充実しました。穀物貯蔵庫、農業用自動車、機械修理所、国営農場で働く人材が充実してきました。モンゴル人が自立して、自分たちで、外国人の参加なしで穀物や野菜を栽培できるようになりました。

そして1986年には93万トンの穀物を収穫できるようになりました。現在減少し、13～14万トンしか収穫できていないのです。1990年まで穀物に関しては国内需要を完全に充足し、外国へ輸出できるようになっていました。収穫が多かった年には収穫した穀物が貯蔵庫に入りきらずに、ナードムをおこなう広いスタジアムに回収していたのです。ジャガイモ、食用野菜もまた同様でした。自給自足し、ジャガイモをロシアのシベリア、イルクーツクに輸出していました。それ以外に非常に大きな家畜飼料基地を有するにいたりました。寒害や干害の年には家畜を飼料で飼養して救っていました。20あまりの大規模な飼料工場を設立し、混合飼料など、多くの種類の飼料を作っていました。私は農耕、農業の発展というこのすべての歴史的出来事に直接参加しました。

4 モンゴルの挑戦

L：最初、モンゴル人が農耕をおこなうことは大変だったことでしょうか。どうやって彼らに農耕を教えていたのでしょうか？

G：これは非常に複雑な問題です。社会的、経済的に多くの問題を同時に解決する必要がありますがありました。また精神的な問題もありました。昨日ウマの背にまたがり疾走していた人びとが農民になるというのはそれほど簡単な、思い通りに行く仕事ではありません

せんでした。トラクター運転手、コンバイン運転手を国営農場の本部や県の中心地において、ロシア人専門家の下で45日間研修させていました。のちにアルホスタイやザーマルの常設教習所で養成を始めました。

当時1つの驚くべきことをロシア人たちが話していました。「モンゴル人は物事を学習する特別な才能を持った人びとだ」とモンゴルで当時働いていたロシア人たちが話していました。特に機械に関して非常に驚くべきものがあると話していました。モンゴル人はロシア人に教わって、たった45日の実習をするだけでトラクターを操作したり、コンバインを運転したりすることができていたのです。本当にウマで疾走していた若者たちが2カ月後にはその近代的な機械を操作し、未開地を耕作し、黄金の穀物をたなびかせて走るというのは驚くべきことです。私たち自身も誇りに思っていました。本来ならば教育するのはかなりの年月を必要とする作業です。モンゴル人がきわめて短期間のうちに技術を習得し、自分たちで独自に土地を耕作し、穀物を栽培することができるようになったことは本当に大きな成果でした。

L：耕作地をどうやって選択するのですか？

G：耕作に適した土地を選択するためのソ連の大規模な調査団が活動していました。自国の調査団も活動していました。耕作に適した土地は事前に選択していたのです。それら調査団の調査によって、モンゴルには農耕に適した130万ヘクタールの土地があるとの結論が出されました。その中から自然、気象条件が特によいセレンゲ、トゥブ県の未開地の開墾を始めました。そして開墾を続け、およそ100万ヘクタールを開墾しました。1990年までこのような形でできました。

L：あなたは西部諸県の国営農場の農場長を務められましたよね。中央部の諸県、西部の諸県はどのような違いがありましたか？

G：まあそうですね。私は西部県のある飼料農場の農場長を務めました。テス飼料農場といってザブハン県北部のほとんど国境線上にあるような農場でした。そこに赴任し、2～3年務めました。モンゴル人民革命党の命令で赴任しました。そこでは8年間収穫がなかったのです。もともとはソ連の協力、資金で設立された非常に大きな農場なのです。そこに赴任しました。そこに赴任し、専門知識というのは人間にとって非常に必要なものであるということをよく理解したのです。その地ではモンゴルで農耕を行っている中央部地域とは非常に異なり、地味が貧しく、栽培期間、栽培品種を適切に選択することが非常に重要であることがわかりました。これに基づき、そこで使用していたすべての技術を更新しました。

たとえば、中央地域では1ヘクタールあたりに170、180～200kgの種をまきます。そこでは90～120kgまで減らしました。地味の貧しい土地にたくさんの種をまけば生育によくはないことは明らかでした。ですから種の基準量を減らし、風による浸食を防止する新たな技術を導入しました。そして私の務めていた3年間、毎年よい収穫を得ま

した。最初の2年は国の最高の褒賞を受けました。このような感じで勤務しました。そこでは本当に私の習得した農学という専門が必要とされました。2つ目に入びとを適切に組織することができました。いかなる仕事をする上においても要領を得ることが非常に重要です。

L：モンゴルの国土の中で農耕を発展させるのにもっとも適した場所はどこですか？

G：モンゴルで農耕にもっとも適した土地はセレンゲ県です。国内の農業生産の約40%をセレンゲ県が占めています。穀物の約42～43%を供給していました。現在は約50%供給しています。現在は穀物時代が失われた時代なのです。かつては90万ヘクタールで農耕をおこなっていたのに対し、現在では20万ヘクタールに達するかどうかといった面積でしか農耕がおこなわれていません。穀物総需要の約60%を輸入により調達しています。ジャガイモ、野菜はほとんど外国から輸入しています。このような状況にいたっていることは残念です。これには、まあ、具体的な理由があります。それは状況を正しく評価し、モンゴルの農牧業というこの重要部門を市場経済体制に移行させることができなかったことです。国の政策は当該の時期にこの部門を市場経済体制に移行させる指針を明らかにすることができなかったのです。また農民たち自身の無責任な活動など様々なことが原因でこの部門は低迷に陥っています。

現在、農耕部門を復興、再起するという目標を掲げています。我が新政府の施政方針、党の選挙公約にこれに関して非常に具体的な問題が言及されています。復興を目指して本年より多くの事業をおこないました。現段階で復興の兆しが見られるようになりました。この結果に大きく満足をしています。

5 移行期における農業復興政策

K：農業をどうやって復興させますか？

G：農業部門が低迷にいたった理由の中に技術基準が順守できなくなった状況があげられています。また、栽培している種苗の質が悪化し、良質の種苗の播種ができなくなっています。秋に収穫した質の悪い種を春に再び播種するようになりました。また、農耕に使用している機械がかなり老朽化しています。この部門で働いている人びとに市場経済的経営、マーケティングについて教育することが危急の問題となっています。このような4、5個の要因が低迷に至らしめた原因としてあげられます。

旧ソ連より農業部門のすべてのものを輸入しており、中でも機械を借款で購入していました。この借款は1990年に完全に停止されました。国営農場では老朽化した機械の更新ができなくなりました。

また国有財産の私有化により1つの国営農場が10数個、20数個の農場となり規模が縮小し分割されて能力が低下しました。このようなたくさん原因により低下を続け

て、現在、低下は底をついたと私たちはみています。今後、来年より復興が始まるだろうと考えています。

本年休耕地の耕作をかなりよくおこないました。播種しようとする農地を耕して1年間休ませます。これを休耕地と呼びます。本年、休耕地は本当によく準備されました。このことは来年の収穫が50%準備できたということなのです。

農耕の復興は国内経済、国民への食品供給、牧畜飼料などにより影響を与えることは明白です。現在家畜飼料を栽培する農地はほとんどなくなってしまったため寒害が起こると多くの家畜が死亡しています。このような寒害はかつても起きていました。しかし、このような規模の家畜が死亡することはありませんでした。このような情けない状態に陥ることはありませんでした。このように国内外に手のひらを差し出して物を乞うことはありませんでした。なぜなら、寒害を克服するための大量の飼料を準備していたからです。飼料を準備することが可能だったのです。その飼料のおかげで自然災害である寒害を完全に克服することができていました。

また、当時の牧民たちの働き方も非常に異なっていました。自分たちで家畜を太らせ、家畜用の柵や囲いを作りました。現在は家畜が私有財産となったにもかかわらず、一部の家庭では国の援助を待ち続けています。これはあってはならないことです。家畜の飼料基地を再び復興することは牧畜業を救済し、牧畜業を発展させることにつながります。

L：農耕が復興すれば家畜飼料の生産も復興すると考えていらっしゃるのですか？

G：そうですね、いずれにしても家畜の飼料として飼料用植物の栽培から始める必要があります。そしてそれを少しずつ混合飼料に切り替えていく目標を掲げるべきです。大規模の工場をこれから復活させるのは難しいです。おおよそ10年間ほとんど稼働していません。それらは現在廃屋同然の状態です。民営化されても十分な成果にいたりませんでした。一部の工場は別の用途の工場になってしまっています。総じて今後社会主義時代の大規模工場ではなくとも、小規模工場を牧民の身近な場所に、郡の中心地か県の中心地に設立する目標が掲げられることになるでしょう。

6 専門家の育成

K：未開地開墾時にあったご苦勞に関してお話しいただけませんか。具体的な例があればお願いします。

G：未開地を開墾して農耕を大いに発展させる上でかなりの苦勞がありました。なぜなら、この部門はモンゴル経済においてまったく新しい部門だったからです。モンゴル人がまったく新たに始めた仕事なのです。私たちはこの部門をまったく知りませんでした。モンゴルではかつて手作業による農耕を多少おこなっていました。しかし、

それはそれほど大きな規模ではありませんでした。我が国の指導者たちをはじめとして、すべてのことを学ぶ必要がありました。

当時は指導者や幹部の方々に農耕の講義をおこなっていました。私は地位の高い幹部がたに農耕の授業を教えていたのです。彼らと地方に行き、実習をしていました。皆植物の栽培をしたことがなかったため、このように実習に行くとき初めて経験するのです。Yu. ツェデンバル首相も農耕用の車に乗って、自ら野菜の栽培を教わっていました。私は彼の隣に座るのです。首相は、

「で、これはどうやって植えるのですか？」と質問していたものでした。このように全国民が注目して初めて、全国民の注目の的にして初めて、未開地の開墾をおこなったのです。当時はモンゴルに農耕作業を教えることのできる国内の専門家はいませんでした。生産現場で実際に働くことのできる農学技師はいませんでした。1959年に農牧業大学が設立され、多くの農牧業の専門家を養成し、現在42年が経とうとしています。

当時はこのような状況はまったくありえず、外国の専門家が働くのみでした。農牧業専門家を養成するこの大学の設立、国内専門家の養成問題は大きな政策となっていました。科学的な根拠を有する独自技術の開発、自国品種の開発がきわめて大きな意義を有する事業でした。明らかに、将来にわたってすべてのものを外国の手法に基づいて実施してはなりません。

そこで、穀物についてはモンゴルで名をはせた「オルホン」品種を開発しました。その後も、多くの品種を開発しました。野菜の品種も開発していました。これらすべては最初の試みであったため常に困難に直面していました。60年代初頭、穀物を運搬できないことから腐らせたり、実った穀物を完全に収穫することができなかったり、といったことがよく起こっていました。初期のころは収穫物を保存する貯蔵庫がありませんでした。国はこれに関して大規模な政策を実施し、70年代中ごろには翌年播種する種や収穫物を保存する貯蔵庫を十分な程度に建設しました。このころ、新たに12万トンの種を保存する貯蔵庫、約4万トンの種を保存する国家備蓄貯蔵庫、115の農牧業用機械修理工場を国営農場に建設しました。このようにして、農耕用の物的基盤は10～20年の間に整備されました。これ以前、トラクターは屋外に置かれ、屋外に置かれたトラクターを冬季の厳寒の中修理することができませんでした。春を待ち、暖かくなって初めて修理を始めるのです。そうすると次の播種の時期が遅れてしまいます。翌年播種する種を屋外で保存していました。屋外で保存した種は簡単に傷みます。70年代中ごろからこのような問題はなくなりました。そして新たな技術が導入され始めました。70年代後半、80年代はモンゴルにおける農耕の最盛期でした。

L: 1ヘクタールあたりの収穫量はどれくらいでしたか？

G: 1ヘクタールあたりの収穫量は、70～80年代は1～1.2トンを下回ることはありません

せんでした。1ヘクタールあたり1〜1.5トンというのはモンゴルではとてもよい数字と見なされます。現在は0.7から0.8トンの収穫です。これは本当に不十分な数字です。農耕生産の低迷に影響を及ぼしている重大な要因に技術基準を遵守できないことを先に挙げました。近年、我が国では休耕地を準備することができなかったり、期間内に播種できなかったり、種を本来の方法で輸送できず土地にあった品種を入手できなかったり、といったことが起こっています。このすべてが最終的に農耕の低迷の原因となっているのです。かつての状態に復興するには技術基準を厳しく遵守すべきです。それには現在の市場経済体制に適応した形で農耕を営むよう手法を変える必要があります。

旧体制時代にはすべてのものは国が供給してくれるものでした。現在はそうではありません。農耕を営む生産者は私有財産に依拠した生産者であるため、国は全体的な経済的条件や環境だけを整備します。このことに関してのみ支援します。あるいは税制面の支援をする。本当に生産をおこなう義務はその民間企業や農民の役割であるべきです。この点が異なります。

7 土地私有化の課題

L：土地の権利関係に関する問題があります。農地は国有で、そこで農耕をおこなっている企業は民間企業です。このような関係をどのように調節していますか？

G：土地の権利関係の問題は本当に大きな問題となっています。土地を私有化する可否か、多くの議論があります。現在土地は国有財産のままです。農耕を営む企業や牧畜を営む牧民の家畜は私有財産です。国有財産上で民間企業が生産を行っているということです。この権利関係を正しく調節することが私たちのもう1つの目標となっています。国土が広く、人口が少ない、都市・インフラの整備が遅れているモンゴルとしては土地の権利関係問題を最初に正しく解決しなければ危険な状況が生まれる可能性があります。この問題の解決に当たってはヨーロッパ諸国の経験に基づいて「我が国でも完全に私有化すべきだ」といった状態で接してはなりません。

土地というのは、まったくもっていかなる国においてもきわめて微妙な問題の1つです。モンゴル憲法では土地をモンゴル国民に私有化してもよいと定められています。しかし、現在は未だ私有化されていません。また、モンゴル憲法によれば土地は60年まで関心を有する国内外の個人、団体に賃貸できます。賃貸はさらに40年延長することができます。すると土地を100年間賃貸で占有できる可能性がモンゴル国民、法人、外国の個人、法人に対して開かれているのです。

モンゴル人は、土地をウマや家畜を所有するようには所有したことがありません。そのような伝統は、我が国にはありません。モンゴル人が土地と接してきた経験とい

えば、「土地を掘ってはならない。掘ると龍神、地神の怒りにふれる」などといったことだけが言われてきたはずで。土地を耕したり、地下の資源を利用したりする経験は本当にほとんどありません。そのような経験は過去40年に限ってほんの少しずつ積み上げられてきたのです。

モンゴルにおいて家畜を私有化し、個人に与える上でいかなる困難な問題もありませんでした。いずれにせよ数百年にわたり家畜は私有財産であり続けてきた伝統があるのです。モンゴル人は家畜を放牧し、皮革を加工し、飲食し、売買することをやってきました。土地との関係ではそのような経験はありません。土地を踏みしめる、ゲルを建てる、植物を家畜に食べさせるといったこと以外に土地については知らないのです。そこに存在するその素晴らしい土を穀物に変える、そのような経験はありませんでした。これは私たちの土地との関係に関する1つの特徴です。ですから土地を私有化するのとは危急の問題ではないと考えている人が多いのです。

我が国の一部の政治勢力が土地私有化問題を加速化させる必要があるときわめて強く要請しています。彼らは「世界の市場経済体制諸国では土地を私有化している。我が国で早急に土地の私有化をしなかったことが国内経済の将来的発展の障害となっている。土地を経済の流れに乗せる 때가 やってきたのだ」と言うのです。この意見を純粹に理論面から検討すれば非難すべきことは何ともありません。現在のモンゴル国の状況から見れば、土地は私有化されてしかるべきでしょう。しかし、その時期にいったのかどうかという点では議論があります。

国家大会議の秋期常会で土地新法を審議します。その法案には私たちは土地を私有化するとの条項は入れていません。しかし、土地を占有させるという条項は入れてあります。新法では土地を個人に対して自由に占有させる権利を与えています。土地占有者が自分の土地を2年間使用しなければ返還させ接収するとの条項があります。このような条件で10年、20年、50年の期間土地を占有することができます。

この法律の新しい観点は、土地の恩恵を享受するための活動の実施、土地の占有を学ぶメカニズムを作り出すことにあります。たとえば、土地を担保に銀行から融資を受けることができるとする条項を入れてあります。何よりもまず、土地を占有することを学ぶためにこのような経済的メカニズムを現出する必要があります。これは土地をゆくゆくは所有するための準備となる移行期であると私たちは考えています。このようにモンゴル人が土地をその経済的な常識通りに理解できるような条項を入れてあるのです。

牧草地は将来的にも私有化してはなりません。これはモンゴル国の土地権利関係の独特な特徴です。モンゴル国は牧草地で遊牧経済を営む国家なのです。我が国の牧民は自然や気象の影響の下、家畜を放牧して生活しています。ある冬寒害が発生します。私が私有化で得た牧草地で寒害が発生したとしましょう。私はどうしたらいいのでし

ようか？そうなるとあなたが私有化で得た牧草地を、私は自分の家畜のために利用させてもらいオトル（よい牧草地を求める短距離の移動）をする必要がそのうち生じます。これは、我が国の遊牧経済の数百年にわたる経験によって確証されたことです。このときすべての家畜を渡しても支払いきれないほど高額な料金を請求されたらどうしましょう？ですから、現段階で牧草地を私有化することは絶対あってはなりません。

しかし、牧草地を適正に利用するための事業を実施して牧草地利用のための若干の料金を国に支払うなどのことはあってもよいでしょう。このようなことを土地権利関係において考慮し、新法に反映できるよう活動をしています。法案はこの春作成されて国家大会議に上程され、国家大会議で作業部会を設置の上審議がおこなわれており、かなり洗練されてきています。これから秋期常会にて審議され、その常会で採択されることでしょう。

8 ゴンガードルジ氏の家庭

K：あなたのプライベートに関して質問させてください。お子さんは何人いらっしゃいますか？奥さまとはどのようにお知り合いになられたのですか？

G：子どもは5人います。妻は教師です。私たちは普通に知り合いました。結婚式や披露宴など派手なことはしていません。私たちの時代は財産もなく、スーツケースに入った服以外に何もない状態で結婚していたのです。私たちもまたそのような状態で結婚しました。私の妻はアルハンガイ県の出身です。私たちはウランバートルで知り合いました。師範大学をモンゴル語学文学教師という専門で卒業しました。師範短期大学に務めていました。現在は個人で仕事をしています。子どもは娘が4人、息子1人です。全員学校を卒業し、独立して働き生活をしています。1番下の娘はドイツに留学しています。その上、すなわち下から3番目の子は現在アメリカで博士課程に留学しています。エコノミストの専門で学んでいます。

9 国营農場の運営

L：農耕を営んでいた国营農場およびネグデルは栽培した野菜や穀物を、当初はどのような形で利用していたのですか？

G：当初、農耕は国营農場が営んでいました。ネグデルは牧畜業を営むものでした。後に家畜の飼料用に穀物をたくさん栽培するようになりました。70年代からネグデルの農耕が向上してきました。全国の農地総面積の3分の1がネグデルの農地でした。ネグデルは商品たる穀物や野菜を国に納めて、その残りを自分たちの需要に使っていました。ネグデルは牧畜のために飼料を自分たちで作っていたのです。冬季、寒害にな

ったときに使用する目的で郡の備蓄、ネグデルの備蓄として準備していました。穀物の栽培はネグデルにとって有益なものでした。

L：農耕に利用していた機械、トラクターやコンバインをローンで購入していたのですか？

G：その多くは購入していました。ソ連の援助、資金で建設された農場に関しては機械をソ連が無償で与えていました。それ以外は毎年が必要に応じて機械を購入していました。

L：機械購入のための資金源はどこからでていましたか？家畜を生体で輸出して、その見返りに機械を購入していたのでしょうか？

G：農牧業用の機械類の購入資金源は様々でした。1970年代よりモンゴル国は生体での輸出はやめました。1940, 50, 60年代は家畜を生体で大量に輸出していました。ですからロシア側はモンゴル国境近辺に複数の食肉加工工場を設立していました。しかし、家畜を生体で輸出することは国内経済に不利で損失も大きいと考え、国内に食肉加工工場の設立を開始したのです。ドルノド食肉加工工場、ダルハン食肉加工工場、ウランバートル食肉加工工場など、大規模な食肉加工工場が設立されました。家畜をトールバル（食肉工場などに家畜を追う移動）で新たに設立された食肉加工工場のある場所に届け、屠殺し、その肉を輸出するようになりました。食肉以外に家畜に起源する原材料、皮革や羊毛、カシミア毛、牛馬の柔毛などを輸出するようになりました。これにより得た利益は農牧業用の機械類を購入する主要な資金源となっていました。天然資源、鉱物資源などもありました。

10 野菜栽培の成功

L：国営農場の栽培した最初の食用野菜には消費者はたくさんいましたか？一部のネグデルでは栽培した野菜を構成員である牧民に対して労働日当に換算して配分したけれど食べなかったという話もあるのですが。

G：食用野菜を大量に栽培し始めた時期は60年代のことです。当時、食用野菜には消費者がほとんどいませんでした。モンゴル人は主に肉を食していました。しかし、ジャガイモは多少食べていました。食べる野菜といえばジャガイモでした。これは定住地区での話ですが。1960年代末、70年代初頭から食用野菜をだんだんたくさん消費するようになってきました。ネグデルでは最初労働日当としてジャガイモ、野菜を支給していました。それを持って帰って谷間に捨ててしまっていました。それもまた1つの歴史として残されました。国営農場は当初から労働者たちに給与を現金で支払っていました。

K：私たちはアムガラン国営農場に行ってみたいと考えています。そこに行くとあな

たが働いていたころの何かを見いだすことができますか？

G：そこに行くと3階建ての赤い建物があります。その北側には花壇があるはずです。現在その当時に働いていた人びとは全員いなくなってしまったでしょう。その赤い建物の横に事務所が入った低い小さな建物、もう1つ低いずんぐりとした赤い建物などがあるでしょう。その北側あたりに昔利用していたいくつかの温室の残骸があるかもしれません。現在はほかのものに取って代わってしまったのではないのでしょうか。その近辺は国营農場の本来の所有下にあった土地です。その周辺、舗装道路の南北はすべて野菜が栽培されていました。その農地はこの国营農場の遺産といってもよい野菜畑です。

K：そこでどのような野菜を栽培していたのですか？ジャガイモですか？

G：いいえ。ニンジン、カブ、タマネギ、ニンニク、キャベツなどの香味野菜を栽培していました。現在は何を栽培しているか知りません。その西側に1つの大きな温室があります。行ってみてください。そこで年間四季を通じて野菜を栽培していたのです。ウランバートル市はその国营農場で栽培した野菜だけで暮らしてきたのですよ。現在の靴工場がある場所にこの国营農場の野菜畑がありました。そこにあったかつての建物を取り壊して靴工場を建てたのです。

そこからもっと西に行くのアグロ・アムガラン、デブシルと行った国营農場があります。そこは6ヘクタールの土地を有しています。そこは72年以降に設立されました。私が農牧業省副大臣を務めていたときに設立しました。ウランバートル市に年間四季を通じて香味野菜、トマト、キュウリを供給する目的で設立したのです。現在もかなり順調に運営されています。アムガラン国营農場を引き継いだ農場といえます。

11 果実栽培の試み

L：食用野菜以外に果実はどれくらい栽培していましたか？

G：60年代果実栽培のきわめて大きな運動が広まりました。たくさん栽培していました。ツァガーン・トルゴイ国营農場があります。オルホンのシャーマル国营農場など果実栽培で有名な国营農場が生まれました。果実栽培で高名な国家賞受賞者シャグダルさんなど、多くの有名な人びとが生まれました。シャリン・ゴルにブルガリアの技術・経済援助により果実栽培特別農場が設立されました。そこでは沙棘 (*Hippophae rhamnoides*)、クロフサスグリ (*Ribes nigrum*)、リンゴをたくさん栽培していました。

モンゴル人には1つとても悪い気質があります。私たちはこれまでおこなってきたことを、時代が変化したときに新たな状況に適合させて引き続き発展させていくことができないのです。時代の変化に際して、これまでできていたことを捨ててしまいました。ふと気づいてみるとそれが行方不明になってしまっています。

その果実農場を現在にいたるまで続けていたならばモンゴルのかんりの場所に果樹園ができていたはずで、ある程度の果実が実っていたはずなのです。これらの農場の経験から見ると、果実類の植物はモンゴルの環境でよく生育していました。ゴビアルタイ県のビゲル郡でブドウを栽培していました。アホイ・ダルマンガーン・ゴル、バヤンホンゴル県のイヒーン・ゴルで香味野菜を栽培していました。ハルハ・ゴルに非常に大きな学術研究所がありました。そこにはフチトというとても優秀な農学者がいました。そこではかなりの種類の果実を栽培していました。

ハルハ・ゴルでは育たない果実、野菜はありませんでした。ハルハ・ゴル地区は果実に関しては我が国最大の地区なのです。ここは将来性が高いです。総計で27万3000ヘクタールの面積を有しています。そこには1つの大きな国营農場が設立され、モンゴルの森林ステップなどで栽培できない様々な植物を栽培していました。たとえば大豆があります。大豆をそこで栽培していました。現在ではこれもまた失われてしまいました。その地区は果実、食用野菜の栽培に関して本当に素晴らしい地区です。そこには約3万ヘクタールの機械式灌漑システムがあったのです。今日現在では3000ヘクタールにも満たなくなっています。

12 国营農場の解体

現実がこのような状況であることを非常に残念に思わずにはいられません。このようにできていたこと、このようなものがあったということについては問題がありません。現在なくなってしまうことがまったく残念です。私たちは存在したものをなくしてしまい、現在再び作ることを話し合っているのです。存在したものを整備し、さらに継続的に発展させ、今日もっと新しいものを作り出すことを話し合っていたならばどんなによかったことでしょう。このすべては農牧業部門でおこなわれた私有化によって引き起こされたのです。私は個人的に私有化が適切におこなわれたとは考えていません。農牧業部門の私有化は確かに実施すべきでした。しかし、どうやって私有化するのか、その方法を誤って選択してしまいました。国营農場をほんの1日にして、

「さあ、君たち、これで解散だ！」といって散り散りに解散してしまいました。あるトラクター運転手は若干の土地と1台の69型ジープをもらっただけで会社の社長になったといって出て行ってしまいました。そのような人びとは市場経済下でどのように働くべきかをまったく知りませんでした。市場というものを何も知らないで会社を作り、かつて働いていた国营農場の財産を分割してしまいました。このように何の準備もなく私有化がおこなわれました。資産が民間に移れば他のすべてのことは自然に解決するといった幼稚な理解がありました。これで市場経済に移行できたという理解で

した。

私の理解では私有化を国が調整し、国家の調整に従ってその改革をおこなうべきだったのです。牧畜部門でも同様です。家畜を個人に与えました。そしてその他のものを捨てました。市場経済の環境をどのように整備するか、あの大きな家畜囲いをどうするか、例の作り上げた飼料基地をどうするかなどについてまったく考慮されていません。そして家畜を個人に与えた後、家畜囲いやその他のすべてを解体し、郡の中心地やその他の場所に運搬しました。これは私有化自体が大きく間違った方法でおこなわれたせいで起こりました。

私はセレンゲ県の党委員会の委員長を務めた後、1986年農牧業大臣に就任しました。そして閣僚会議の農牧業問題担当次長になりました。この3年間に我が国では契約、賃貸といった手法が非常に強力に浸透しつつありました。その手法はすべての人びとの注目をとても引いていました。牧畜業部門で牧民と契約をおこない、賃貸していました。ネグデルや共有の財産である家畜を賃借した牧民は契約以上に増えた家畜を自分でもらってよいことになっていました。この手法を利用していたとき、私有の家畜頭数は非常な速度で増加し始めました。農耕部門も同様です。農民は契約をして土地を賃借するようになりました。そして穀物を自分たちで納めるようになっていました。

当時、人びとは物質的な欲求が非常に大きくなっていました。モンゴルではこの方法が非常に適した方法だったと私は考えます。この方法をもう少し継続する必要がありました。そうしていれば、家畜は民間に移るべくして移るし、土地もまた同様に民間に移って行く可能性が開けていたはずでした。そうすれば、すでに作り上げた牧畜、農耕の生産基盤を崩壊させ、失うことは起こりません。それは現在に至るまで牧民や農民にサービスを提供し続けていたことでしょう。

契約、賃貸といった方法はモンゴルの農牧業部門が市場経済体制に移行するのに最も洗練された最良の方法のモンゴル・モデルとなったはずです。私は農牧業部門に40年間尽力してきました。私はそのように考えているのです。現在でもそう考えています。この方法の長所を鑑みることなく、ネグデルや共有の財産である家畜を直接私有化し、国営農場を解体してしまったため、状況を飲み込めなくなった多くの人たちが破壊するだけの活動をおこないました。その時以降、現在にいたるまで農牧業部門発展の問題を包括的に検討することができなくなってしまいました。牧畜部門を単独で私有化したことで農牧業部門が全体として市場経済体制に移ることができないことが明確になってきました。この間、社会問題がきわめて厳しく浮き彫りになってきました。病院、学校の問題をどうするか。なぜ今日、西部諸県からの大規模なウランバートルへの移動が始まっているのか。これはそこで人の生活環境を整備しなかったことに起因しているのです。

家畜の私有化後に人の生活環境を整備する国家政策を実施すべきです。しかし、こ

の政策はまったくなされませんでした。ようやく今になってこれに関する話題が出るようになりました。地方開発，地方政策と言われるようになりました。国家大会議の常任委員会でもこれに関して審議されています。これまでの行為は間違い以外の何ものでもありません。

K：農耕を営む人びとの数はかなり減少しているのですよね？

G：もちろん減少しています。たとえば，モンゴルには90万ヘクタールの使用可能な農地があったのに，現在では40万ヘクタールに満ちません。そこで働いていた人の数も半分に減少したと言うことです。

13 近年の社会動向

K：遠方の県から都市，市場に近づくために移動してきている家庭の戸数は判明しているのでしょうか？

G：そのような統計は今のところ出ていません。その数字は調べることはできます。しかし現在，正確に何戸が移動して来ているのか私たちは把握していません。かなりの数が流入しています。ウランバートルだけでも羊頭数に換算して70万頭の家畜がいるとの統計があります。これは羊頭数に換算した家畜頭数ですよ。本来は14～15万頭でなければなりません。しかし，今日その5～6倍の家畜が集中してしまっています。これから見るとウランバートルへの集中は過度なものです。この状態が今後も継続すればモンゴル国は「ウランバートル国」になってしまいます。

またもう1つの大きな問題が浮かび上がっているのですが，それは土地を均等に利用できていないことです。1カ所に過度に集中して居住していることから，その牧草地を酷使して利用し尽くしてしまっています。自然，気象の変化から河川の多くが干上がっています。このような状態が今後広まり長期間継続すればこの国の未来は非常に暗澹たるものとなってきます。

L：この2年ほど前から「緑の革命」とよく言われてきました。これはどこのプロジェクトだったのですか？そのプロジェクトはどれくらいの成果を取めたのですか？

G：そのプロジェクトは非常に成果を上げたといってよいでしょう。このプロジェクトの一環として生活レベルが低くて貧しい国民の生活を向上させる目的で彼らに野菜の栽培を教えていました。大都市，県や郡の中心地に生活している国民に対して野菜の栽培を学ばせ，日常生活で野菜を食すことを学ばせる目的で実施されたプロジェクトです。まあ成果を上げました。現在も継続中です。これは純粹に我が農牧業省が所轄して実施しています。生活レベルの悪化した人びとを支援する別のプロジェクトもあります。「貧困撲滅プロジェクト」といいます。これは「緑の革命」とはまったく異なるプロジェクトです。

「緑の革命」は国家予算より経費を支出し野菜を栽培する菜園を設立して、そこで野菜栽培を広める目的を持っています。目的を完全に達成することはできないでしょうが、貧しい生活を余儀なくされている人びとの生活の役には立っています。

他にご質問はありますか？

14 日本による農業支援

K：モンゴルの農牧業の発展に関し、日本とどんな協力をおこなっていますか？

G：農牧業部門で日本と非常に成果のある協力を行っています。過去数年、草の根無償案件、KR2（食糧増産を目的として機材等を贈与し、その収益によって自立的なプログラムをおこなう援助方法）という案件を成功裏に実施しています。これらの案件の一環として日本の機械をたくさんいただいています。

過去数年間我が国の農牧業用機械の更新を日本のKR2という案件によってのみおこなっています。この案件で農牧業用機械のかなりの部分を更新しました。ここ3年連続してトラクター、コンバインをいただいています。この案件の枠内で導入されたトラクターは台車なしで納入されています。我が国にあるロシア製の古い台車はそれには使用できません。私たちはこれに関して日本側に何度も説明しています。しかし無理なのでしょうか、台車なしで納入され続けています。これにより技術基準違反が生まれています。本当ならば日本製のトラクターが台車とともに納入されればよいのですが。私たちはそれにロシア製の台車を改造して取り付けるなどモンゴル風に扱っています。しかし、それほどいい具合ではありません。本来トラクター自体は性能の高い、素晴らしいトラクターなのです。たとえば「UK」という日本製の素晴らしいトラクターが来ています。

今年は休耕地の準備、種の問題について日本がよく援助してくれました。約10億トゥグルグの援助をおこないました。このおかげで諸企業に融資をおこなうことができました。このように目に見える、具体的な援助がたくさんあります。

農牧業部門の専門家の養成を支援する問題が危急のものとなっています。我が国では旧体制時代に養成された専門家たちに対する市場経済体制という新条件下での再教育や新規に国内で学習している人々への良質な教育実施の必要があります。このテーマで現在1つのプロジェクトが話し合われています。私は日本大使と2日前会見しました。その会見で農牧業大学の充実、設備や研究所の刷新のための1つのプロジェクトが話し合われました。私は大使に対して、

「このプロジェクトを日本政府は支援するべきです。農牧業部門では今後そこで働いている専門家たちや人材を通じて発展が生まれるのです。モンゴルの農牧業部門の人材を養成するこの大学をもう少し整備、充実させる必要があります。モンゴル国の予

算、財政が逼迫しているこの時期、私たち自身の力は不足しています」との要望をいたしました。先ごろおこなわれた支援国会合でも日本からの援助は他国よりも多かったのです。

これから3万1000トンの小麦を輸入しようとしています。これもまた収穫の少ない現在大きな貢献となります。昨年約2万トンの米をいただきました。こうしてこのように日本のきわめて多くの援助をいただいています。

明日、北海道のある学者たちが私と会見することになっています。彼らは昨年私を訪れ、会見して帰っていきました。私たちは協力してジャガイモを栽培することに関して昨年話し合いました。北海道は寒冷な地域で環境がモンゴルと似ています。モンゴルは寒冷で高原であるためジャガイモがとてよく生育し、また品質も非常によいです。日本から投資をおこないジャガイモを共同で栽培するならば、我が国にはジャガイモ栽培のための農地、機械はすでにそろっています。この方面で協力することも可能だと私は昨年彼らに提案しました。先ごろ調査をしにやってきました。彼らは昨年の訪問の時に、

「モンゴルのジャガイモの種苗はとて悪くなっています！」と言っていました。このような協力を今後継続していきましょう。総じて協力を拡大することはきわめて必要なことです。ハルハ・ゴル地域の開拓に日本側から提案があれば私たちはどのような形態の協力であれ土地の利用を拒否することはないと考えています。この地域は地味、栄養が豊かで素晴らしい土地であると私は先に述べました。このような多くの案件があります。今後の協力を農牧業開発に向けられれば非常によいと考えます。

15 再協同化の動き

L：ネグデルの解体以降、牧民を再び組合組織に組み入れたり、牧民を市場と結びつけたりする問題をどのように解決しようとしているのですか？

G：これは我が国が農牧業部門に関して依拠している主要な政策です。なぜなら、家畜の私有化後、牧民たちは同じ谷間に住む同士だけでまとまり、50年代のネグデル設立以前の状態に戻ってしまいました。牧民はネグデル設立以前の昔の形態になり、1人1人、各々が「うちのうち、お宅はお宅」といった感じでそれぞれの谷間、それぞれの山間に住むようになりました。このような状態で何年も経ちました。牧民たち自身は、

「こんな状態で同じ谷間に住む同士だけでまとまっていたはならない。牧草の刈り入れ、搾乳などの労働を共同し、組織としてまとまらなければならない。寒害が起こった時も同様だ」と言うようになっていきます。もともとネグデルというのはそんなにもひどい過誤の産物ではありません。国が過度に関与して本来の意義を若干失わせてい

たのです。それを排除すれば本当は正しいものであったのです。単なる協同組合なのです。協同組合の意義を失わせて国営にしてしまっていたのです。ここに主な過ちがあったのです。現在我が国の牧民たちは、

「共同しよう！労働を共同しよう！5人で、10人で、兄弟で、知り合い同士でまとまって共同しよう！協同組合を設立しよう！かつての農牧業ネグデルのように大規模でなくてもいいから、小規模の協同組合を設立しよう！」と言うようになりました。

このことを私たちは非常に正しいと考えています。国際機関、アジア開発銀行が援助をおこなっています。これは本当に適当な契機です。また小規模牧場を私たちは支援しています。現在、我が国に30万戸あまりの牧民家庭があります。つまり30万の小規模牧場があるということです。1人孤立して取引もおこなわず、国内外で活動もおこなわず、売上口座もない。ですから一部の力のない者たちを共同組合に組み入れ、力のある者たちは独立して小規模牧場として発展させる、このような2つの形態が我が国の農牧業にはきわめてふさわしいものとなるでしょう。牧民たちは自発的にこれをおこなっています。国が上から組織してはなりません。下から出てきた意見を国が支援するべきです。資金的な支援、法制面での保証をおこなう必要があります。

現段階で設立された多くの協同組合があります。工場に農牧業起源の原材料を供給することが現在大きな問題となっています。草原に散らばった牧民たちから皮革、羊毛、カシミア毛を回収することは非常に困難な問題です。我が新政府の施政方針にこの問題が反映されています。私たちは卸流通網を整備する必要があると考えています。そして郡やバグに卸拠点を設けてそこで回収する目標を掲げています。そこに牧民たちの必需品を都市などの定住地域から持ってきて販売することになります。

このような経路は過去の「通商調達部隊」の形態と同じものです。しかしかなり市場経済的な組織を作ろうと考えています。これは非常に重要な問題で、非常に困難な問題です。この家畜起源の原材料は現在自由に外国に輸出されています。南部の諸県では馬車に乗せて運搬し、国境から輸出しています。家畜起源の原材料は我が国の戦略的重要製品です。それなのにこれを売却、輸出する問題については秩序を失っています。モンゴル国内の工場は原材料がなく停止しています。それなのに皮革、羊毛、カシミア毛は国境を越えて輸出されているのです。このような状況は今後あってはなりません。国家政策を私たちは一貫させる必要があります。経済メカニズムを整備し、税制によって調整するべきです。

我が国の原材料は非常に安価に輸出されています。きわめて高価な羊毛、カシミア毛が安価に流出し、その代わりにかつて自国で栽培することのできていたキャベツ、ニンジン、小麦粉などが輸入されているのです。それからエレーン・ホト（モンゴル・中国国境の中国側の町）の市場のゴミのような製品が輸入されています。

私たちはロシアのミルクを飲んで寝そべっているのですが、モンゴルの乳牛は子牛

を連れて歩いているのです。これは私たちが極めてだらしないうことの証明です。生産的でなく、怠惰な証拠です。私たちは現在外国からミルク、乳製品を輸入し、外国からジャガイモを輸入しています。これではいけません。私たちは心を入れ替え、自らの潜在的可能性を利用し国を発展させるべきです。

このためにすべての人が労働すべきです。現在、我が国には社会主義時代の何でももらえんという考えから抜け出せない人がたくさんいます。国が用意してくれたできあがったものだけを消費し、ただでもらったり、あるいは安価に、汗水流さずに座ったままで暮らしたりしたいという考えをもった人がたくさんいます。市場経済体制というのは非常に厳しいルールを持っているのです。人は自らが労働してはじめて暮らしていくことができます。もし労働しなければ暮らしていくどんな手段もないのです。K：私はモンゴルの新聞に記事を書いたことがあります。

G：読みました。ある日本人女性を書いた記事が載っていました。私はそれを家で読んで家内に、「外国人が我が国のことをこのように素晴らしく書いている。我が国の人びとはそれなのに声もなく黙っている」と話しました。その記事に書かれた意見は私のものとまったく一致しています。我が国では過去にもこのような寒害は起こっていました。しかし家畜をこのように大量に死なせることはありませんでした。

「家畜所有」という名の付いたプロジェクトがあります。私はそれが好きではありません。怠惰な牧民が家畜を死なせてしまったのに、家畜をもらおうと言っているのです。「私の家畜が死んだ！お金をくれ！」という風に主張しているのです。このように家畜を死なせてしまった人にお金を渡すべきではありません。飼料など他のものを与えることはいいでしょう。協同組合を設立することで支援することもいいです。牧民が何もせずにいて家畜を死なせてしまい、「さあお金をよこせ！」と要求することはあってはならないでしょう。これは大きな誤りです。

内モンゴルの牧草地は我が国のものよりよくありません。それでも家畜に飼料を用意し、家畜を生かすことができます。我が国の牧民は大量に死なせました。300万頭の家畜を死なせました。過去20年間に我が国で寒害により300万頭の家畜を死なせたことはまったくありませんでした。時には100万頭程度、70～80万頭の家畜を失ったことはありました。今年は少し度が過ぎます。

自然、気象にすべての罪をなすりつけて見過ごしてはなりません。これは自分たち自身の情けない状態を一時的な自然現象のせいになろうとする企てにほかなりません。寒害に関しては、今年はそれほどひどい寒害ではありませんでした。この程度の寒害は起こるものです。今後も起こるでしょう。寒害というのは人の管理能力を試すものなのです。管理能力の高い人は寒害を少ない被害で克服し、管理能力の低い人は大きな損害を被ります。自然、気象現象には本当に厳しいものがありますが、すべてをそのせいにしてはいけません。

過去数年間牧民たちは過度に甘えた状態にありました。夏のあいだずっと祭りをし、競馬をし、相撲をし、馬乳酒を飲み、享樂を甘受して暮らしていました。そして10月に初雪が降り、乾草もなく、家畜囲いもない。そして、「助けてください!」と言って座りこんでしまう。このような状態ではまったくだめです。市場経済的な考え方を持つ必要があるのです。家畜は私有財産であり、ならば自分たちの財産を自分たちで守るべきなのです。

「私は500頭の家畜を有しており、この家畜のおかげで暮らすことができました」と言って自分の家畜を死なせることなく守るべきです。このような考え方が我が国の牧民たちの間には定着していないようです。「この家畜を保護するのは国がするべきです。食べるのは私がします」このような理解をしているようなのです。

16 農耕の妥当性

L: モンゴルで農耕が復興するとして、過去のレベルに至らせることは可能ですか？現在、新たに農地を開墾し、新たな果実や野菜を栽培する必要性はありますか？

G: いや、それはですね。いずれにせよ過去のレベルに達する必要があるのです。そのレベルに達するまで非常に長い道のりがあります。そこに達したのち、今後どうするかということを話し合えばいいのです。少なくとも過去のレベルに達すればとりあえずよいのです。

L: モンゴルの一部の経営者たちの間でこのような話がされています。モンゴルは農耕に適さない、ある日雪が降って、今までの投資が雪に埋もれてしまう。だから必要なものを輸入する方がましである、こういう言われています。

G: そのような考えもありました。しかし近年そのような考えは言われなくなっています。私はその考えにまったく賛成できません。モンゴル国には地味豊かな土地があります。自然、気象条件についても比較的問題はありません。実際にこれまで大丈夫でした。それなのになぜモンゴル国が穀物を外国から輸入しているのでしょうか？中国から安い小麦粉が入ってきました。モンゴルは生産をやめなさい。その小麦粉は今後も安いままでしょうか、どうでしょうか？これは国の今後の経済の状態や独立にまで関わる問題なのです。小麦粉というのは我が国の戦略的に重要な意義を有する製品です。食物を外国からの輸入に頼っている国はいつまで経っても豊かになることはありません。私たちはかつて小麦粉の国内需要を充足していたのに、現在それができずに外国から輸入しているというのは、私たちの至らなさから起こっているのです。ここには何らかの非日常的な要因は作用していません。ですから農耕生産を復興させようと話し合っているのです。

私は現在「モンゴル農民・小麦粉生産者連盟」の理事長を務めています。私はこの

連盟を1997年にカザフスタンから戻ってきて設立しました。この崩壊した農耕を見るに耐えず、この連盟を設立して農民と政府の間の架け橋として何年も働いてきました。私たちは農耕生産復興計画を作成し政府に紹介しました。私たちは、

「第一段階として少なくともかつてのレベルに到達しよう。その際には新たな手法で到達しよう！生産を市場経済体制下で運営できるようにしよう！」といった目標を掲げています。現在、我が国が輸入している小麦粉の品質はよくありません。これが今後の人口の成長や人びとの健康にどのような影響を与えるのか、食料の安全保障をどのように守っていくのかなど、多くの問題があります。私たち自身ができないものは外国から輸入するしかありませんが、できるもの、たとえばミルクをロシアから輸入したり、小麦粉を中国から輸入したりして暮らすのは現実的ではありません。ましてジャガイモ、野菜まで中国、ロシアから輸入して暮らすなどということはあり得ません。現在モンゴルの何人かの経営者はそれにより利益を得ているのでしょうか。まあ、かわいそうな国民の役に立ってはいません。その代わりに私たち自身が働いて、自分たちでこれを作ろうではありませんか。それらを購入するお金で他のものを買ひましょう、他のものを作りましょう、そうしなければなりません。本来ならば作ることができていたものを作れなくなってしまい、作り上げたものを破壊してしまう、このような国は世界中でもほとんどないでしょう。作られた基盤には罪はありません。それを市場経済の環境に適合させて利用し、運営する必要があります。必ずや解体し、解体してから再び基礎を作るという政策はあってはなりません。

17 私有化の過去と未来

L：このような状態に陥ってしまった政治的背景にはどんなものがありましたか？すべての人がこのようになるとは考えていなかったですね？もっとよくなると考えていて私有化したはずですが。

G：政治的背景と言えるようなものはありません。我が国では、この市場経済体制に移行するという問題を、国の独自の特徴と結びつけて考えることをしませんでした。たとえば日本の広野という教授がモンゴルをよく訪れていました。私が首相であったころ、私たちは意見交換をし、協力していました。彼はモンゴル経済を市場経済体制へ移行させるための複数回の講義をおこないました。先ごろ彼がモンゴルを訪れた際にも私たちは会っています。彼は、

「貴国は社会主義から資本主義へ移行しつつある国です。貴国は特異な、独自の極めて独特な特徴を持つ国です。市場経済の発展した西側諸国の理論でやってはいけません。市場経済に緩やかに移行する方法を用いるべきです！」と私に何度も言っていました。私たちはこの問題に関し同じ見解を持っていました。基本的な原則にお

いて私たち2人の考えは一致していたのです。しかし、D.ビャンバスレン政権、私たちの同志たるD.ガンボルドたちが現れ、例の「ショック・セラピー」すなわち「衝撃療法」という手法を実施しました。これは市場経済体制へ移行する経済改革を急激に、ショック的におこなう方法です。経済改革をこの方法で行えば経済が突然改善すると考える理論です。この理論をアメリカの学者サクスたちが提唱し、依拠していました。理論的にはその通りなのでしょう。モンゴルの地ではそうでなかったことを現実が示しています。この理論はモンゴルの状況にまったく適しませんでした。西側のこの理論を直接機械的に模倣する政策に我が国の若者たちは依拠していました。

しかし、彼らはモンゴルの状況下でこの理論をどうやって適用するかということについて想像力を働かせて考えることをしませんでした。このためこの理論によりおこなわれた私有化は失敗したのです。この理論のすべてが我が国には適さなかったのです。確かに西側から学ぶことは私たちにはたくさんあります。でも我が国の特徴というものがあります。たとえば、モンゴルでは遊牧を営み、また国土の位置は不利で、人口は少なく、散り散りな状態で暮らしているなどの大きな特徴を考慮すべきでした。

私の政府では1990年に施政方針を作成するに当たって「国家の調整を伴う経済」という指針を選択しました。言い方を変えれば市場経済体制への移行期初期に国からの調整があるべきだと考えていました。極度に規制されていたものを突然ぱっと解放すれば極めて危険な状態が発生します。たとえば巨大なダムに水がせき止められていたとして、突然ダムが倒壊すると水はどうなりますか？それと同様突然自由になった国民はまとまりを失い、様々な方向に飛び散り、訳がわからなくなってしまうました。1991年に我が国はまさにそのような状態だったのです。無秩序で、訳がわからない状態でした。海の中でオールのないボートが進んでいるようなものでした。

しかし、1994、95年ころから少しずつ目や耳が開いてきたようです。このような状態は、自国の状況に対しこの市場経済理論をどうやって適用するかということを考えなかったから起こったのです。これもまた例の何でももらえるという考え方と関連しています。ここからサクスの、あそこからアダム・スミスの理論をもらってくれば、私たちは簡単に前進できると考たのです。社会主義時代はモンゴル人民革命党が国を代表していました。民主化、改革の1つの目標は国が中心の社会の建設にありました。そのような目標を掲げていたにもかかわらず経済改革をおこなう上で国の関与の必要はないといっていたのです。自分たち自身で掲げた目標に反していたのです。このように無秩序な状態が始まりました。経済刷新は国が関与すべきといった理論の概念は正しかった。しかしどうやって、いつ西側諸国の経験を適用するかということをよく考慮する必要があったのです。かのイギリス、フランス、ドイツが我が国のレベルにあったときにどうだったのでしょうか？彼らの現在の発展したレベルで我が国のこの遅れたレベルを測って、そして彼らの後から頑張ってみてもまったく・・・車にたとえ

ればすべてのタイヤがはずれ落ち、すべてが壊れているのです。祖国のために過った道を進む考えを持つ人は誰一人いません。

我が国の改革者たちは自国の特徴を、世界の市場経済の古典的理論にあわせて、自国の発展モデルを作り出すことに留意しませんでした。そのために国有財産の私有化が失敗に終わり、大きな批判を受けました。成功もたくさんありました。失敗もたくさんありました。民主化、改革が始まって10年になるのに、私たちは未だ自分たちの道を見つけることができずにいます。少し長すぎます。2000～3000万頭の家畜を有し、地下にはたくさんの資源があり、わずか200万人の人口しかない国としてはもっと短期間で向上し、もう少しましな状態であってもよかったはずです。

L：国营農場をピンク・クーポンで私有化しましたよね。ピンク・クーポンによる私有化理論を誰が提案したのですか？

G：あのピンク、青色クーポンというのは、モンゴル国のすべての財産を評価して、それを全国民に対し均等に配分するという理論に基づいて実施されたものでした。あのクーポンによる私有化の理論は本当にわかりにくい理論でした。我が家にも何枚かのクーポンが来ましたが、今は手元になく、どこに行ってしまったのかわかりません。それを「ゴビ」社に投資しました。しかし、そこから何ももらっていません。このようにあのクーポンは何の価値もない紙と化してしまいました。

日本の広野教授が話す方法で行っていたならば我が国は現在かなり進展していたはずでした。国は最初にかなり調整をおこなうべきでした。私が首相を務めていた政府の施政方針にはそのように示してありました。国の調整をかなり大きくしてありました。バーバルやD.ガンボルドたちが私のところにやってきて、

「あなたのあの国家の調整というのは何なのですか？あなたは市場経済を理解していない。アダム・スミスを、あとほかに誰でしたか、を理解していない」と言っていました。私は、

「理論はいいから、モンゴル国ではどうするべきだということを話し合おう」と答えたものでした。

K：あなたは首相在任中、民主勢力の経済理論家たちとよく会っていたのですか？

G：会っていました。D.ガンボルド、R.ゴンチグドルジ、バーバルたちと毎日会っていました。彼らは、

「国家の調整という言葉は施政方針から削除しましょう」と言っていました。その言葉を削除しないまま、我が政府の任期は終了しました。満了して退任したということです。辞職したわけではありません。

「あなたはこれを削除してください、削除しても国家の調整をすることはできるでしょう」と言われました。私は、

「政府が施政方針に入れずに実施するということはどういうことなのか」と言って座

していました。国が初期のころ少し関与していたならば、現在国の関与はほとんどなくなっていたはずでしょう。国の関与を次第に減少していくべきだったのです。当初は国の関与を維持すべきだったのです。現在でも日本の大企業、一部には我が国と同程度、あるいはそれより数倍大きな企業もありますが、彼らは政府と協議なしで問題を解決することはないですね。表に裏に、何らかの形態で政府が調整を行っています。我が国の状態はそうではありません。国とは無関係になってしまいました。本来ならば最初に国の関与を緩めてはならなかったのです。

L：ネグデル解体後、現在再び協同組合を建設する考えを牧民の側が提唱していると先ほどお話になりました。現在、農耕部門を復興させるに当たり、私有化された国营農場の力を使っておこないますか、他の方法を用いますか？

G：牧畜部門と比べれば農耕部門は少し異なった部門といえます。移動を伴いません。ですから農耕部門は個人農場の形態で発展することでしょう。現在存在する大きな企業農場は今後それほど大きな利益を上げられないと思います。個人農場形態は非常に将来性があると考えます。モンゴルの農耕部門は個人農場形態で発展していく将来性があります。ある程度の土地、機械を有し、少数の利益率の高い家畜、また豚や鶏などを飼育してもいいでしょう。土地は賃貸でもいい。このようになるのではないのでしょうか。将来的にその個人農場が世代を重ねて受け継がれていけば、土地を贈与してもいいでしょう。そのような場合は土地売買の問題は出てこないだろうと考えています。今日生活がこのように厳しい状況で土地の私有化を行えば、一部の人が土地を購入し、外国の誰彼かまわずに売却してしまうだろうとたいへん警戒しています。土地がなければ国はないも同然なのです。国は土地の上に成立しているのですから。

K：どうもありがとうございました。